

現地に行くことの大切さ

今回、何よりも良かった事は参加者全員が大きな怪我や病気をすることなく、無事に帰国できたことです。とりあえず、一安心です。普段と違う生活環境の中に1週間もいるのは、心身にとって大きな負担になると思います。それを無事に乗り切ったのも、自己の体調管理ができていたからだと思います。

さて、多様なメンバーが、それぞれの持ち味を生かして、カリマンタンの自然や文化、人々と接する姿が印象的でした。カリマンタンという非日常の中で、日常で制限されている「たが」が外れて、自己発現できるのが、現地に行くことの大切さでしょうか。いきなり結論がでちゃいましたね……。ただ、これで終わりではつまらないので、印象的であったことなど、感想を書かせてもらいます。

・オランウータンやサイチョウと出会える川

4月にタンジュン・ハラパン村を訪ねた際、セコニャール川でオランウータンやカササギサイチョウを見ることができました。タンジュン・ハラパン村を訪れる直前にサラワク州へ行っていました。そこにも熱帯雨林や川があるものの、オランウータンやサイチョウに出会うことはできませんでした。サイチョウに関して、サラワクの村の人達に聞いてみると「昔はいたけど、最近は見っていない」とか、村の若者に聞いても「サイチョウは見たこともない」と話していました。元々、サラワクには分布が少ないなどの影響もあるのかもしれませんが、サラワク州の低地ではサイチョウはほとんど見られなくなっています。4月にタンジュン・ハラパン村を訪れた際は、直前にこうした話を聞いていたこともあり、サイチョウをセコニャール川で見たときはとても感動しました。また、キャンプリーキーでは、オランウータンやテナガザルが与えられる餌を待っていて、簡単に見ることができました。

12月の今回訪問では、最初はサイチョウも見られなかったですし、キャンプリーキーに行った際に、中々オランウータンが出てきませんでした。1時間待っても出てこなかったのも、自分の中では諦めていました。「オランウータンに会えるよ」とツアー前から皆さんに話していたので、見れなかったときの言い訳として「オランウータンが餌やりに来ないと言う事はそれだけ、森に食べ物が豊富にあるってことだよ」という事を考えていました。本当にそうであれば良いのだけれども、この森にはもうオランウータンが少なくなってしまったのかもという考えもよぎっていました。そうしたら、突如、樹々が揺れ、子連れのオランウータンが3人姿を現しました！しばらくすると、テナガザルも1人姿を現しました。オランウータンの樹をしならせながらの移動、テナガザルの素早い巧みな移動術、森に適応した生き物達の躍動感ある動きに感動しました。動物園でオランウータンを見たことがあります。これだけ生き生きとした躍動感ある行動ができるのは、森があるからだと思いました。事前レポートで、「自己発現の場」というのを書きましたが、まさにこの森こそがオランウータンやテナガザルが生き生きできる自己発現の場なのだなと実感しました。動物園では見られない、動物の本来の姿が見られるのも「現地に行くことの大切さ」の一つです。こうして、オランウータンが出てくれたことにホッとしました。そして、の皆さんが夢中でオランウータンやテナガザルを見ている姿を見ることができてとても嬉しかったです。生き物ってこれだけの魅力を持っているのですよね！

セコニャール川では、最初なかなかサイチョウは見れませんでした。最終的には全員が観察することができましたし、個人的には、地球上で個体数が300羽程しかいないというスダエンビコウ(Storm's Stork)が観られたのは感動でした！こうした生き物がそこにいてくれるという事実が、尊くもあり、嬉しく感じました。勝ってながらも、こうした事実が存在する環境がずっと残って欲しいです。

・違法伐採をする人は悪い人？

イサムさんのインタビューがとても印象に残っています。イサムさんは小学校を卒業後、中学校に行きたかったものの、貧しさとクマイに親戚がいないことから、クマイの中学校に行けませんでした。家での稲作を手伝うも、1997年の大洪水で水田が被害を被ってしまいました。そうした中、違法伐採をする仕事が舞い込んできたとのこと。12歳の時に取締があったときに、銃口を口に入れられたこともあったとのこと。それでも、続けなければならなかった経済的事情があることを知りました。こうした状況の中で、イサムさんはとても謙虚で、物事の本質が見えている自分軸をしっかり持っている方でした。今は、FNPFで植林活動やオーガニックファームなどの活動を熱心に行っています。

タンジュン・ハラパン村で、木彫り細工をしているハドランに出会いました。ハドランさんは違法伐採をしたいたとき、その人たちを取りまとめるリーダーの役割をしていたとのこと。現在は、クロトの船長をしつつ、木彫り細工をしているとのことでした。ハドランさんが作るウリンの木彫り細工のオランウータンの顔がとても優しく好きです。違法伐採をしていたとは思えませんでした。

「違法伐採をしている人は、私腹を肥やすために行っている悪い人達」というイメージが以前はありました。今回、イサムさんやハドランさんと出会って、そうではないことがわかりました。それぞれに人としての良さがあり、むしろとても良い人たちだと思いました。もちろん、中には私腹を肥やすための人もいたとは思いますが、そうではなくて、生きていく中で仕方なく違法伐採をするしかなかったのだなと思いました。「材が売れるからこそ、違法伐採がある」こうした現状は誰か特定の個人が悪いというわけではなく、社会のシステムに問題があるわけで、そうした木材を使っている日本の私たちにも問題があるのだなと感じました。そもそも、良い人、悪い人なんてないんだと思うようになりました。

世界では違法伐採や密猟が起きていて、取り締まる動き強くなっているようにも思います。現地の人達を取り締まるよりも、まずは消費している自分達が変わることからなのかなと思うようになりました。現地に出向いて、直接会ったり、話をしたり、その生活を見ることで気付くことができた事でした。

・今後の行動

カリマンタンに行って、自分は様々な事を学びました。森林火災の現場、プランテーションの拡大など様々な問題点を見てきました。でも、今の自分はそれを自分から積極的に他の人に伝えたいという衝動があまり出てきません。RSPO認証マークを広めよう！と思っても、RSPO認証農園が泥炭湿地にありましたよね……。そうであるなら、RSPO認証がもっと良くなるように働きかけることを考えれば良いのですが、それも何か違うのかなと思っています。自分で主体的に何かをするというのは、今のタイミングではないようです。ただ、ウータン森と生活を考える会の活動やツアーに参加した生徒達がやりたい事をサポートしたいという気持ちがあります。他人頼みの行動ですが、今の自分はそれがちょうど良いのかなと思います。

自分がしたい事を考えた時に、「また、タンジュン・ハラパン村に皆で行きたい。」という想いがあります。自分にできることは、こうしたスタディツアーを実施する事なのかなと思います。現地に行くと各自でそれぞれの学びがあります。現地に行くからこそ分かることがたくさんあります。村の人々にも会いたいし、オランウータンもサイチョウもまた観たいです。こうした想いがあれば、日常の生活も自ずと少しずつ、消費を変えたり、寄付をしたりなど、少しずつ変わっていくのかなと思います。

持続的に関わり続けるには、無理をしてはいけないと思います。どーんと1発で燃え尽きる派手な花火のようではなく、じわじわと燃え続ける薪のごとく、自分なりのペースで、ゆるくも持続的にタンジュン・ハラパン村の活動に関わって行けたらと思っています。